

柳田國男の『遠野物語』にみる蛇と茸のコラボ

- 理系人間の視点から -

萩本 宏（菌楽者）

私は、昨年（2011年）の第19回スライド会で「松茸腐生茸の発生と成長の怪異」と題して、マツカサキノコモドキなど松茸に生えるキノコが、妖怪のごとく振る舞って実験の邪魔をすることを報告した。この講演内容は本誌に掲載させていただいている（No.27, 2011）。これは、妖怪学の元祖井上円了氏の妖怪の定義（『妖怪学講義合本第1冊 緒言及総論』1897）によれば誤怪と仮怪であって、私の実験系の組み立てや操作の不手際で生じた誤怪とキノコが生来もっている性（さが）の発現としての仮怪である。それでもキノコは妖しく、面白い生き物である。それは、菌楽者のあくがれ出ずる魂かそれとも心にひそむ鬼か…。

私は、キノコは、美しい、可愛い、可笑しい、妖しい、怖い、美味しい、の六面体（この6項目の内容には相互の重なりがありそうだが、ここでは厳密な定義はしない）で構成されていて、この六つの総体として「面白い」があるように思う。しかし、正六面体ではありえない。それぞれの面の大きさは、個人によって異なるのは無論のこと、キノコの種類によって、同じ種類でも発育段階によって違っているはずである。キノコは見る人によっては女子高生の表現を借りれば「きもかわ」（＝きもい+かわいい）である（四方田犬彦著『「かわいい」論』2006）。即ち、どの種類のどの発育段階のキノコを対象として、どの面を強く意識するかによってキノコは人々に様々な印



写真1 マツタケ

丹波松茸7本で10万円也。昔は、大きくて色が濃い丹波松茸は、小柄で色白、香りの強い北山松茸（＝都松茸：吉村文彦氏率いる「松茸十字軍」が都松茸の復活に取り組中）に対して田舎松茸と蔑まれたが、今は超一級品である。

象を与え、幻想を引き起こす。

私にとってのキノコは、子供の頃はマツタケ（写真1）、シメジ、シイタケ（乾物）と毒マツタケ（前者以外のキノコ）の4種類であった。無論、マツタケの存在感は圧倒的であった。恩師、濱田稔先生（1910～1981；元日本菌学会会長、関西菌類談話会の創設者）は、「マツタケはキノコの王様だ」と仰っておられた。また、古川久彦氏の「きのこ坂、辿り

たどって八回目(『きのこアドバイザー』第15号、2009)によると「マツタケ以外の菌は雑菌だ」と豪語しておられたそうである。

京都では、マツタケは、今は年間5トン前後しか採れないが、私の子供の頃、1930～1940年代には1千トン前後も採れ、1941年には1876トンも採れた。その頃の10月の八百屋の店頭は、つぼみから傘が反り返ったものまで生育段階も大きさもさまざまなマツタケで埋め尽くされていて壮観であった。しかし、私が関心を抱いたのは、楢木に生えているシイタケや野原に群生する小さなキノコであった。生き物はその生きる場にあつてこそ感動を与えるものであることを子供心は鋭敏に感じ取っていたのであろう。

対する蛇、特にアオダイショウ(写真2)は、昔は住宅街でもごく普通に見られた synanthrope(人間の生活を利用して生きる生物)であり、いわば人里蛇であった。この蛇は英名の Japanese ratsnake に相応しくネズミ類を好み、腹盤の左右の側稜で壁や塀、樹木を垂直登坂できるので家の中にネズミがいた時代には屋内にも容易に入ってきて棲みついていた。結婚するまで住んでいた両親の家では、国民学校生の頃には1mを優に超える大物が時々天井や押し入れの中にまで入り込んできた。これを捕らえて外に逃がすのが私の役目であった。大きなアオダイショウは子供の手に巻きつくと重く、咬まれると痛いいうえに出血した。

私にとって茸、といってもマツタケだけであるが、子供の頃は大きさと傘の反り繰り返った形に関心があつた。また、それが生えているところを見たいと思った記憶がある。しかし、濱田先生の門下生になってもマツタケを研究しようとは思わなかった。私の関心はマツタケそのものよりもキノコの子実体形成・成長にあつたので、マツタケは研究材料に適さないと考えたのが理由である。他方、蛇はわが家の厄介者か近所の漢方薬屋のショ



写真2 アオダイショウ

小鳥の巣箱を目指してよじ登るアオダイショウ(足立隆昭氏撮影)。



写真3 田縣神社の豊年祭

愛知県小牧市田縣町に所在。豊年祭では宮司による神前での厳かな籤取式で希望者から選ばれた五人衆(5名の女性)がマツタケの幼菌のような男茎形(おわせがた)を持って行列に加わる。

ウウィンドウでとぐろを巻いた黒焼きでしかなかった。蛇の抜け殻を財布に入れたり、「巳さん」と言って神様扱いしたりしている大人達を内心で蔑んでいた。

ところが、近年になって、茸と蛇は多くの人々の大脳の中で居場所を違え、相互交流のないままに同じような幻想を惹き起こしているらしいことを吉野裕子著『蛇—日本人の蛇信仰』(1979)と森毅編『キノコの不思議』

第1表 蛇と茸の比較

比較項目	蛇*	茸
形態	glans 状の頭部に長くて四肢を欠く体 (phallus 状), とぐろを巻いて頭を擡げる姿から vulva を連想 (両性具有性; 吉野裕子氏*) 光り赫く目、蛇行、脱皮、長時間の交尾	頭部は glans 状、全体が phallus (マツタケの幼菌・スッポンタケ、タケリタケ) 基部につぼ (→ふぐり) や長毛状菌糸・菌糸束 (→陰毛) veil を hymen と見立てる (両性具有性; 中沢新一氏**)
色彩	脂膏による妖光	美麗、妖しい色、発光性
毒性	毒蛇	毒茸
臭気	アオダイショウなどの臭み	腹菌類のグレバは悪臭を放つ
神性	蛇は祖先神 (蛇と蛇巫との媾合) 蛇神 (大物主 - 大神神社) 崇拜・畏怖と嫌悪の両極性	茸に神格なし 菌神社 (御神体は茸ではない)
妖怪性 (異様性)	脱皮 (新生・更新) 蛇が人 (特に男) に化ける 人 (特に女) が蛇に化ける (安珍清姫)	突発的発生 勃起的成長 (スッポンタケなど) 気味の悪い崩壊や脱分化 両性具有性 (veil hymen; 中沢新一氏「ふたつのきのこ」『キノコの不思議』1986)
Phallus 的 イメージ	夢分析 (フロイト的) 趨穴性 (蛇穴)	夢分析 (フロイト的) 詩歌での禁句、艶笑譚・艶笑落語などの題材
可愛らしさ 美しさ	幼蛇? ジムグリ (<i>Elaphe</i>) 海外には多種類の美しい種類あり	アカヤマタケ属、ホウライタケ属、クヌギタケ属、イッポンシメジ属など小型で美麗

* 蛇についての記載の一部は、吉野裕子著『蛇 - 日本の蛇信仰 - 』(1979) 同『日本人の死生観 - 蛇信仰の視座から - 』(1982) を参考にさせていただいた。

** 中沢新一「ふたつのきのこ」森毅編『キノコの不思議』1986

(1986)の2冊の本から示唆された。その幻想を惹き起こすものを蛇と茸から引き出すべく両書を参考にして蛇と茸の比較表を作ってみた(第1表)。すると蛇と茸の間には phallus 形(写真3)と妖怪性という二つの共通項が浮かんできた。

今日ではキノコは植物ではないが、かつては細菌などとともに植物と見なされていた。顕花植物に対して隠花植物と呼ばれたり、高等植物に対して下等植物と言われたりした。私が所属していた研究室では顕花植物の研究をしている人は高等族、菌類の研究をしている人は下等族と呼ばれていた。キノコは植物の仲間という通説に従うと、芽が出て、緑の葉が展開し、花が咲いて種ができる植物を見慣れている人にとって茸は形、色彩、生きざまなどすべてにおいて極めて異端的な植物として意識されざるを得ない。特異な進化を遂げたサボテンやカワゴケソウなどと比べてもキノコは異様である。ちなみに、田中貴子氏は自著『鏡花と怪異』(2006)の第4章「茸の怪異」の中で「鏡花が茸という植物(というよりも生物、といった方が適切かもしれない)に関心を持っていたらしいことはよく知られている」と記し、田中氏はキノコを植物とみることに違和感をもっていることを括弧内に表現している。

他方、蛇は気持ちが悪いし、怖いというイメージも強い。蛇でなくても長くて足のない動物を気味悪く感ずる人は多い。梁漁で落ちアコ掴みをしていた猿が、ウナギがかかってによりよろしだと急にそわそわし、ウナギが近づいてきたら恐怖に慄いて猿回しにしがみつ、遂には肩にまで登って避難する映像を見たことがある。猿が蛇を極度に恐れるところを見ると、人間はヒト以前のはるか遠い昔の時代に蛇嫌いを擦り込まれたのではないかと思えてくる。他方、人と異種生物との婚交は、馬や河童などもあるが蛇が最も多い。蛇が美男に化けるのである。蛇の趨穴的？な

生態と phallus 状の形態が交婚譚を作り上げたと思われる。更に、蛇は、大昔から神として崇められ、蛇信仰は現在までも連綿と続いている。人の蛇に対する感情は畏怖と嫌悪を縋い交せて長い年月の中で重層化されている。

川の淵や沼などに大蛇が潜む物語はごく普通であるが、それが大鰻にとって代わっている場合がある。村上静人著『魚族説話』(1944)には「鰻に関する説話」という1章が設けられていて、様々な話が載っている。徳島県の海部川の支流の母川のオオウナギはよく知られているが、この川の深淵には1丈余りのオオウナギが棲んでいて、女兒を土手で遊ばせ、この淵の近くで洗濯をしていた母親を飲み込んだという伝説がある。

遠野(写真4)に伝わる話を柳田國男氏(1875~1962)(写真5、6)に語った佐々木喜善氏(1886~1933)(写真7、8、9)も自著『聴耳草子』(1931)の101番「鰻男」で鰻が男に化けて美しい娘を孕ませた話を書いている。更に伴蒿蹊氏は『閑田耕筆』(1801;有朋堂文庫、1927)に「薯蕷(やまいも)の半鰻魚(うなぎ)に化したるが、彼薯蕷の分析たれば、生氣出ずやみたる物を、まさしく見たりといふ人ありき。谷川の岸の自然生(じねんじょう)の芋、水に漬かりて化するとぞ。」と記している。蛇と鰻と山薯はおろか、後述するように机の足まで細長いというだけで大脳の状態によっては相似性が生ずるのは驚きである。

吉野裕子氏は、沖縄でヤシ科のピロウ [*Livistona chinensis* R. Br. ex Mart. var. *subglobosa* Becc.; 漢字は蒲葵、沖縄の方言はクバなど]を見て phallus を直感的に想起し、扇の起源をピロウに求め、扇に秘められた聖と性を喝破し、さらにピロウに蛇の姿まで見てとった(吉野裕子著『扇』1970)。まことに驚嘆すべき連想力である。氏は、蛇信仰は今も我々の生活の中に鏡餅や注連縄などとして生き続けていることを多くの資料を挙げ

て論じている(『蛇 - 日本の蛇信仰 - 』1979、
『日本人の死生観 - 蛇信仰の視座から - 』
1982)。

他方、茸、特にマツタケが phallus の隠喩



写真4 高清水展望台から眺めた遠野盆地
手前を流れるのは『遠野物語』に「川には河童多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。」と書かれた猿ヶ石川、市街地を分断して流れるのは早瀬川。両川は JR 遠野駅の少し西で合流する。展望台への道は離合困難、軽自動車ではひやひやしながら往復した。



写真5 柳田國男氏像
遠野市の「とおの昔話村」の中にある「柳翁宿」(柳田氏が遠野を訪れた際に宿泊した高善旅館を移築保存した建物)の前にある。



写真6 柳田國男氏の生家

兵庫県福崎町西田原に所在。元は現在地よりも約100m 南にあったが、保存のために1974年に現在地に移された。4畳半と3畳の間がそれぞれ2間ずつの小さな家に両親、兄夫婦、國男、靜雄、輝夫(後の松岡映丘画伯)の7名が住んでいたという。

だと知ったのは、濱田先生にマツタケは古代から人々に知られていたかどうかをお尋ねした際に「万葉集にマツタケと思われる歌(「高松のこの峯も狭に笠立てゝ 盈ち盛りたる秋の香のよさ」万葉集2233、巻10秋雑歌)があるが、マツタケという言葉が詠み込むことは憚られたので昔の文献には載っていない」とのお答をいただいてからであった。

マツタケは宮中の女房言葉では単に「マツ」と言い、公の歌に詠み込むことはもっての外であったらしい。ところが、柳原紀光著『閑窓自語』(1793~1797)(日本随筆大成編輯部編纂『日本随筆大成』1928)によると、「寛延二年(1749年)九月々次和哥御会に、故殿秋山といふ事をよみ給ひける、あかす猶たけかりくらしかへるさにこのみをひろふ秋の山ふみ。桜町院(著者注:天皇在位1735~1747、没年1750、桜町院は追号)仰せられけるは、内々の和哥には、この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ。それよりこのかた、たけがりのことをおほやけわたくしのうたにも、人々よみ侍るなり。」とマツタケを和歌に詠み込むことが許されたようである。

英国のヴィクトリア朝時代（1837～1901）には、“underwear”という言葉は禁句で、それを“unmentionables”と言っていたそうである。この時代の人々は、性が徹底的に秘匿されていたので机の脚にも興奮したらしい。



写真 7 佐々木喜善氏像

遠野市の「伝承園」の中の「佐々木喜善記念館」の入口の側にある。



写真 8 佐々木喜善氏の生家

遠野市土淵町山口に所在。今も佐々木家の方々がお住まいである。高柳俊郎著『柳田國男の遠野紀行』（2003）にある生家の写真とは建て替え或は改修されて変わっているが、曲り屋形式は継いでいる。

それを逆手にとったのか、妖精画家リチャード・ドイルは、抑圧されたエロティシズムの秘めやかな誘発装置として妖精画にキノコを描き添えたと言われている（ニコラス・マナー著・小川眞訳『ふしぎな生きものカビ・キノコ 菌学入門』2007）。

従来、妖精画にキノコが随伴するのは、妖精が夜中に踊りまわった跡にできるとされていたフェアリー・リング（妖精の輪：キノコがリング状に発生した状態）に関わるものと考えられていたが、それだけではないらしい（荒俣宏著「正視できぬキノコ」『花空庭園』2000）。ルネッサンスの巨匠からポール・セザンヌを経てサルヴァドール・ダリに至るまでギリシア神話で有名な「レダと白鳥」を画いており、セザンヌは白鳥を洋梨に替えたが（『芸術新潮』1995、No.6）白鳥（の首）と



写真 9 佐々木喜善氏の墓

墓は氏の生家のある村を見下ろすダンノハナ（111話、112話、114話）と称する丘にある。この地は山口館の一部で死者への回向の地とも処刑場跡とも言われている。墓は1953年に柳田國男氏が『遠野物語』の印税の一部をあて、折口信夫氏が「佐々木喜善之墓」と揮毫して建立された。氏の生家を挟んでダンノハナの向かい側（西側）のそれほど遠くない所にデンデラ野がある（111話、112話）。

metaphor として同義のスッポンタケ（写真 10）に替える画家はいないものか。

進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの娘（3女）のエティ（Etty Darwin）は先の尖った杖と手袋で身を固め、スッポンタケ退治をしたと伝えられている（『ふしぎな生きものカビ・キノコ 菌学入門』）。当時のイギリス人にマツタケやタケリタケを見せて反応を観察してみたかった気がする。インターネット（www.mushroomexpert.com）上にはスッポンタケの成菌がその根元の左右にまだ柄の出現していない幼菌、即ち volva（つぼ）と呼ばれる二つの卵状の袋を従える状態で phallus を連想するように仕向けたとしか思えない写真が公開されている。

『今昔物語集 4』（『新日本古典文学大系 36』1994）には「松茸ヲ裏集（つつみあつめ）タル如ニシテまら（漢字は門構えに牛）九ツ有り」とマツタケを直截的に phallic と表現している（川端善明編・訳『聖と俗 男と女の物語—今昔物語新修』（2010）に「外術滝口」として見事に訳されている）。マツタケに関わる艶笑譚はたくさんあり（小川眞著『マツタケの話』1984、有岡利幸著『松茸』1997、岡村稔久著『まつたけの文化誌』2005）、落語のネタにもなっている（小島貞二編『定本 艶笑落語（全）』1990）。マツタケと構う春画さえある（『滑稽好色絵巻』江戸中期：私は原本を見ていない）。そのために半世紀前には「マツタケの研究をしている」と言えば怪訝の顔をされた（『マツタケの話』）。

瀬戸内晴美著『花芯』（1958）という題名の用語は、植物学にはない。雄蕊と雌蕊の生物学的意味を介して妖しげな連想を惹き起こす装置になっているが、花を愛でる人は、それが植物の性器であることなど意識したりはしない（日高敏隆・白幡洋三郎編『人はなぜ花を愛でるのか』2007）。形態や機能を意識しながら花を見るのは鑑賞ではなく観察である。意識が切り替わった瞬間に花の美しさは消え



写真 10 スッポンタケ

西欧における phallus の metaphor であるスッポンタケ（小寺祐三氏撮影）。

失せ、時にはグロテスクでさえある。

キノコとても同じことで、キノコはカビの性器であるが、マツタケの性器を集めているなどと思いながら松茸狩りをする人はまずいないし、食べるとなれば尚更であろう。それにも拘わらずマツタケが全く別の次元での男性器の隠喩であるのはなんとも滑稽であり、マツタケもさぞ困惑していることであろう（注：キノコの veil を hymen に見立ててキノコは hermaphrodite だと言っている人がいる；中沢新一著『ふたつのきのこ』森毅編『キノコの不思議』1986）。

マツタケの幼菌（蕾＝未開傘状態のもの）とスッポンタケの成菌はそれぞれ日本と西洋を代表する phallic なキノコである。スッポンタケはその学名まで *Phallus impudicus* L.:Pers. である。この学名の意味を知ったのは、1955 年、3 回生の秋に理学部附属植物園に生えているのを見つけて、その成長を調べる際に参考にした川村清一著『原色版 日本菌類図説』（1929）と川村清一著『原色日本菌類図鑑 第 6 巻』（1954）によってであった。即

ち、phallus はギリシア語の phallos 由来、impudicus(恥知らずな、淫らな)はラテン語由来と記述されている。しかし、このキノコは phallus よりも和名の通りスッポンが卵から顔を出した様子の方が似合っているように思う。

私にはマツタケとスッポンタケが似ているようには思えない。蛇と蕾のマツタケと成菌のスッポンタケはともに phallus に擬せられるが、三者と phallus は膨らんだ頭部と長い体部というごく大雑把な共通点を有するだけで、それぞれの頭部と体部は似ているとは言い難い。ところが、医学用語ですら phallus の先端部に当たる glans(原語の意味は堅果)の訳語に蛇と同じ爬虫類の亀の頭、即ち「亀頭」を当てているほどであるから蛇とマツタケとスッポンタケを phallic と見做すのは大脳のごく自然な働きなのかもしれない。

世間では、何かと何かが互いに似ると言う場合厳密な、幾何学的相似でなく、一部分の類似、それも極めて大雑把な類似を指している。マツタケでは色彩も phallus に関わっているそうである。他方、スッポンタケでは形だけではなく、直径4～5cmくらいの卵状の袋、volva(つぼ)から15cmくらいまで数時間で伸長する動的な姿や伸長後のグレバが放つ臭気までも含めて *phallus* という属名が与えられているように思えてならない。

私は、動物と菌類(私は、菌類は植物でなくなり、動物、植物と同列に位置付けられたのだから「菌物」とすべきであると思う)という違う世界の生き物が共に phallus の隠喩であり、さらに妖怪的な生き物として人々の頭の中に居座っているのであれば、両者が出逢って何らかの協力作業をするような物語、「蛇茸譚」が成立してもよさそうに思っていたが、そのまま年月を過ごしてきた。ところが、たまたま飯沢耕太郎著『きのこ文学大全』(2008)にそれらしき話が柳田國男著『遠野物語』(1910)と『遠野物語拾遺』(『遠野物語』

(1935)の増補版に含まれている)にあることが紹介されていて、大いに興味をそそられた。さらに、このアンソロジーによると柳田國男氏は室町期以前にはマツタケという表記がないことを訝っているという興味のある一文があった。

「蛇茸譚」は後まわしにして、先ずマツタケの「表記」を調べるために原典(柳田國男著「鳴瀝の文学」『不幸なる藝術』筑摩書房1967;初出は『藝術』1947)に当たったところ、柳田氏は「私なども実のところ、いつか一度キノコデーとも名づけて、思う存分茸の話を聴く機会をこしらえたいとまで思っているのだが、ふしぎなことの一つは、これほど日本で人望のある松茸というものが、歌や物語はさておき、日記消息の中にも室町期以前には、めったに現われないことである。まさか外国から来た新種でもあるまいに、名でも違っていたか食いようを知らなかったか京都周辺の松茸山を、近世になって急にあのように騒ぎ出したのは妙なことである。何かまだ我々の知らぬような、わけがあって隠れているものと思うのだが、それを考えているとまた話が長くなる。」と書いている。私はその長くなる話を是非聞かせてもらいたかった。

柳田氏の「歌や物語はさておき、」は、松茸は歌や物語では禁句であるから「さておき」なのか(まさに「わけがあって隠れていた」のである)、「歌や物語」のような文学性の高いものには出てこないのは当然ということで「さておき」なのかよく分からないが、桂園派の歌人松岡國男でもあった氏がマツタケが禁句であったことを知らなかったとは考え難い。また、「日記や消息にも室町以前には滅多に現われない」というのはいささか承服しかねる。手工業が発達し、市場経済化が進み、都市化が促され、人々の識字率が向上したと思われる室町時代以降ほどではないにしても、マツタケの記載は次に掲げるように決して稀なものではなかった。

先に掲げた『マツタケの話』や『松茸』、『まつたけの文化史』によると、マツタケは『古今和歌集』(913頃成立)の素性法師の詞書、『拾遺和歌集』(1005頃成立)、『梁塵秘抄』(1169頃) 三条実房公の『愚昧記』(1167~1195; 1177) 藤原定家卿の『明月記』(1180~1235; 1199, 1230) 藤原永経女の『中務内侍日記』(1292頃、1287) 兼好法師の『徒然草』(1330年頃)の第118段、伏見宮貞成親王(後崇光院)の『看聞御記』(1416~1448; 1416) 近衛政家公の『後法興院記』(1466~1505; 1467, 1481)などに記載されており(年代は日記類の執筆期間とマツタケの記載のある年代)、『今昔物語集』(12世紀前半の成立)にも載っていることは既に紹介した。

京都を囲む山々は、大昔は照葉樹主体の森で、アカマツは他の樹木が生えない尾根筋の瘦地に生えていただけだったのでマツタケは珍品であったはずである。平安遷都によって人口が増えると多くの樹木が燃料や建材用に伐採され、その跡地にアカマツが進出してマツタケは増えたと思われる。しかし、人口がさらに増加するとアカマツも再生不能なまでに伐採されて禿山の状態になるので、マツタケは金閣寺山のような仙洞(上皇・法王)や公家を接待したような特殊な場所にしか生えなくなったのではないかと推察する。ちなみに、鹿苑寺(金閣寺)の住持鳳林承章禅師は1635から1668年に至る日記『隔蓐記』に1636から1667年までのマツタケの発生本数を記録している(濱田稔著「Archaeo-ecology(1)」、『マツタケ日記』1974)。

ところが明治時代になって政府が伐採の禁令を出したので、生態学の遷移の法則通りに禿山にはまずアカマツが繁茂し、更に雑木や落ち葉が燃料や肥料として山から取り出されたので、土壌は貧栄養化し、アカマツとマツタケに好適な環境が整って20世紀の前半にマツタケの大豊作がもたらされた。しかし、マツタケの盛衰の原因を語る事ができるよ

うになったのは、戦後に濱田一門のマツタケ研究が進んだ結果であって、柳田氏が疑問を呈した時期では分からなかったのは無理からぬことである。

私は、柳田氏は著作において「性」について論ずることを意図的に避けたので、『忘れられた日本人』(1960)の中の一編「土佐源氏」にみられるような性愛を真正面から取り上げた宮本常一氏とは相容れなかったと読んだことがある。事実、『遠野物語』と『遠野物語拾遺』(以下『拾遺』)と略記する)では直截的な話は、蛇(ヤマカガシ)がvulvaを愛撫している後者の180話にある極めて短い話だけで、その他はコンセイサマ(金勢様、金精様: phallus形で、子授け・安産・豊饒の神様)について前者の16話、後者の15話と16話、下着にまつわる話が同じく後者の254話と258話にごく簡単に記述されているだけである。

佐々木氏は、晩年には民俗学の同好者の間で性民俗研究の権威とされていたらしく、佐々木喜善著『遠野の昔話』(山田野理夫氏編、1988)などには卑猥な話がいくつか収載されているところから推察すると柳田氏は佐々木氏から寄せられた猥雑な話は除外したと推察される。この事について、礪川全次氏は「柳田國男における性愛の民俗学」(礪川全次編『性愛の民俗学(歴史民俗学資料叢書第3期第3巻)』2007)で柳田氏は禁欲的・道徳的な性規範を身につけた教養人であったので、土着的な性民俗の世界を受け入れ難かったことに加えて欧米先進国を規範にして文明開化の推進を意図した明治政府との軋轢を回避しようとしたからであると推論している。

これは、柳田氏が東京帝国大学法科大学出身で農商務省のエリート官僚から出発し、勅任官である第4代貴族院書記官長(参議院事務総長の前身)や枢密顧問官まで務め(1951年の文化勲章受章の他に1962年の没後に勲一等旭日大綬章を授与されているが、これは

主に官職によるものであろう)更に養父(妻の父)が大審院(最高裁の前身)判事を勤めていた柳田直平氏であったことから当然だったのかもしれないが、私はむしろ呱呱の声をあげたばかりの民俗学が誤解されることに対して慎重に配慮したと推察している。

一方で、礪川氏は、柳田氏は性の問題を論文や著書にしていなくても、強い関心を抱いていたことを南方熊楠への書簡や沖縄で女性の下穿きを調べるために半日も忍耐強く覗きの機会を窺い(結果は失敗)そこから清少納言や紫式部が何を纏っていたか推察したことなどを理由にあげて説明している。沖縄の女性には自説の「海上の道」論に基づいて平安時代の遺風が見られるとでも思ったのかもしれない。

この南方氏宛の書簡の内容はその時代を考慮しても啞然とさせられる荒唐無稽なもので到底ここに引用できるものではないが、これに関連して礪川氏が根田仁著「特産奇譚・きのこの情景」(『特産情報』農村文化社;私は原文を読んでいない)の「七難の揃毛(そそげ=陰毛)」「しばしば寺社の什宝になっている」と「山姥の髪(ホウライタケ属、ナラタケ属などの菌糸束)」の関係についての記述を引用しているのに驚いた。

なお、柳田氏の「キノコデー」の提案は、明治末期の第一次妖怪ブーム時代の「百物語怪談会」が下敷きになっているような気がする。この提案をヒントにしたのかどうか知らないが、日本特用林産振興会が1995年に10月15日を「きのこの日」と定めた。しかし、これはキノコの需要を促進するためで、柳田氏の意図を具現化したとは言い難い。私は、むしろ各地に沢山ある菌類談話会やキノコ研究会などが主催する研究会や観察会がまさに「キノコデー」であると思う。

ついでに、柳田氏は『原色版日本菌類図説』(1929)を読んでいたことが「嗚呼の文学」のマイタケについての記述からうかがえる。

また、新谷尚紀著『民俗学とは何か 柳田・折口・渋沢に学び直す』(2011)には郷土会会員による柳田氏の渡欧送別会(1922年5月)の記念写真が掲載されており、前列中央に日本菌学会の初代会長草野俊助先生(1874~1962:柳田氏よりも1歳年長、同年にご逝去)が、その隣に柳田氏が写っているが、両者にどのような交流があったのか説明がないのは残念である。

話がだいぶ横道に逸れてしまったが、2010年は濱田先生の生誕100周年であるとともに、『遠野物語』が出版されて100周年でもあった。これは何かの縁と思って限定350部発行(内200部は著者が贈呈用を買取った)定価50銭の初版本『遠野物語』(1910)、『遠野物語増補版(『拾遺』を含む)』(1935) 文芸春秋選書5の『遠野物語(『拾遺』を含む)』(1948)、『定本柳田國男集』第4巻(1963)に収められている『遠野物語』(『拾遺』は柳田氏の執筆ではないとして含まれていない)と『新版遠野物語 付・遠野物語拾遺』(2004)(『拾遺』は編輯・鈴木棠三になっている。この経緯は増補版や新版の柳田氏の「再版覚書」と折口信夫氏の「後記」を参照)更に前出の『聴耳草紙』と『遠野の昔話』、佐々木喜善著『遠野奇談』(石井正己氏編、2009)を読んだ。予期したことではあったが、蛇は物語の主役的な地位で沢山話題に上がっているが、キノコについては「茸採りに行った際に…」という記載が殆どである。

しかし、両者のコラボと言えなくもない物語が『遠野物語』と『拾遺』に一つずつあることは前述の通りである。前者にあるのは、飯沢氏が『きのこ文学大全』で「とりわけ印象的な話」として紹介している旧家の山口孫左衛門家の没落に関わる話である。孫左衛門は、山口館(やまぐちだて:山口城館)当主の末裔との話もあるらしいが、実在したお宅らしく今も佐々木家の近くに井戸の跡(写真11)が残っている。



写真 11 山口孫左衛門屋敷の井戸跡

屋敷は残っていないが、井戸跡が佐々木喜善氏生家の近くにある。しかし、井戸の孔口は見つけることができなかった。

『遠野物語』の山口孫左衛門家にまつわる話は四つの話からなっている。最初に事件の予兆を重点的に、事件のあらましを述べ（18話）、19話から21話まで事件の経過を逆にたどるように記述している。即ち、主人の孫左衛門は村の土着の神を粗略にして京都から稲荷社を勧請して丁重に祀っていた（21話）。使用人たちは主人が止めるのも聴かずに蛇を殺した（20話）。主従が毒茸を食べて女兒一人を残して全員が死んでしまい、親戚縁者や知人が寄りたかって家財道具から食物まで持ち去ってしまった（19話）という文章構成である。夙にお読みになっている方も多いと思うが、ここに味わい深い原文を初版本（私が読んだのは350部中の101号）から引用しておく（漢字は新字体に変更した）。漫画好きの方には、水木しげる・柳田國男著『水木しげるの遠野物語』（2010）がある。

18 ザシキワラシ又女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門と云ふ家には、童女の神二人いませりといふこと久しく言伝へたりしが、或年同じ村の何某と云ふ男、町より帰るとて留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢へり。物思はしき様子にて此方に来る。お前たちはどこから来

たと問へば、おら山口の孫左衛門が処から来たと答ふ。此から何処へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答ふ。その何某は稍離れたる村にて、今も立派に暮らせる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなと思ひしが、それより久しからずして、此家の主従二十幾人、茸の毒に中りて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、其女も亦年老いて子無く、近き頃病みて失せたり。

19 孫左衛門が家にては、或日梨の木めぐりに見馴れぬ茸のあまた生えたるを、食はんか食ふまじきかと男共の評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食はぬがよしと制したれども、下男の一人が云ふには、如何なる茸にても水桶の中に入れて芋殻（をがら）を以てよくかき廻して後食へば決して中ることなしとて、一同此言に従ひ家内悉く之を食ひたり。七歳の女の児は其日外に出で遊びに気をとられ、昼飯を食ひに帰ることを忘れし為に助かりたり。不意の主人の死去にて人々の動転してある間に、遠き近き親類の人々、或は生前に貸ありと云ひ、或は約束ありと称して、家の家財は味噌の類までも取去りしかば、此村草分の長者なりしかども、一朝にして跡方も無くなりたり。

20 此凶変の前には色々の前兆ありき。男ども茹置きたる秫（まぐさ）を出すとて三ッ齒の鍬にて掻きまはせしに、大なる蛇を見出したり。これも殺すなと主人が制せしをも聴かずして打殺したりしに、其跡より秫の下にいくらかとも無き蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分に悉く之を殺したり。さて取捨つべき所も無ければ、屋敷の外に穴を掘りて之を埋め、蛇塚を作る。その蛇は妙（あじか）に何荷とも無くありたりといへり。

21 右の孫左衛門は村には珍しき学者にて、常に京都より和漢の書を取寄せて読み耽りたり。少し変人と云ふ方なりき。狐と親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、先づ庭の中に稲荷の祠を建て、自身京に上りて

正一位の神階を請けて帰り、それよりは日々一枚の油揚げを欠かすことなく、手づから社頭に供えて拝を為せしに、後には狐馴れて近づけども遁げず。手を延ばして其首を抑へなどしたりと云ふ。村に在りし薬師の堂守は、我が仏様は何物をも供へざれども、孫左衛門の神様よりは御利益ありと、度々笑ひごとにしたりと也。」

この山口孫左衛門家に関わる話は、『遠野物語』の中の特にながな話で、『遠野物語』刊行 100 周年を意識して世に送り出されたと思われるいくつかの出版物で『拾遺』の 228 話と共に紹介されている（飯沢耕太郎著『きのこ文学大全』2008、石井正己著『『遠野物語』を読み解く』2009、三浦佑之・赤坂憲雄著『遠野物語へようこそ』2010 など）。さらに、吉本隆明著『改定新版共同幻想論』（1968）は『古事記』と『遠野物語』に拠っており、山口孫左衛門家から出てきたザシキワラシに出逢った村民の予兆譚に触れている。

もう一つの話は『拾遺』の 228 話で、こちらにも飯沢氏がごく簡単に紹介されているが、増補版（1935）から引用した本文は次の通りである。

228 「同じ附馬牛村の字大沢には、砂沢という沢がある。此沢合を前にして、某といふ家があるが、或時この家の爺が砂沢へ仕事に行つて、大蛇に体を呑まれた。幸ひに腰にさして居た鎌の為に、蛇は唇を切られて死に、爺は蛇の腹から這ひ出すことが出来た。家に帰つて此話をする、村の者達が多勢集まつて来て、砂沢へ行つて見た。如何にも其処には大蛇が死んで居たと謂ふ。それから数年の後、銀茸に似た見事な茸が其沢一面に生えた。煮て食はうと思つて、爺がそれを探つて居たら、洞の何処かで、油させさせと言ふ声がする。多分茸を煮る際に鍋へ油を入れよといふことであらうと思つて、其通りにして賞味した。ちやうど近所の居酒屋に若者達が寄り集まつて居たが、此茸があまりに見事なので採

つて来て煮て食つた。すると此方は十人の者が九人まではその夜のうちに毒に中つて死に、少ししか食はなかつた者でさへ三日ばかり病んだと謂ふ。是は岩城君といふ人が壮年の頃の出来事だと言つて語つたものである。今から四十年近くも前のことであらうか。」

この話は、山口家の没落の話に比べて理解し難い話である。なぜ洞から「油させさせ」という声が聞こえてきたのか。その声はなぜ爺だけが聞いたのか。そして、なぜその通り調理して食べた爺は中毒にならなかったのか。爺は日頃から洞の中に祀られている神を尊崇していたからか。蛇はなぜ自分の死と関係のない若者に猛茸を食わせたのか。死んだ若者は殺し損ねた爺の代理か。また、キノコ毒は油で不活性化されるのか、油に捕捉されて吸収されずに排泄されるのか。それとも油を加えると温度が上昇して分解されるのか。様々な想像を巡らすのだから…。なお、著者は昨年 9 月初旬に遠野市を訪れ、この話の場所を探したが見つけられなかった。遠野物語研究所でも尋ねたが、まだ確定するまでに至っていないとのことであつた。

これらの二つの話で蛇殺しの祟りはどうして茸中毒なのか、その理由を思い巡らして、遠野ではキノコは極めて大切な山の幸であつたのではないかと考えるに至つた。そうだとすれば多くの人がキノコ中毒になつたはずで、人々は毒茸を大変恐れていたことは想像に難くない。更に蛇も茸とともに山里の生き物であることに加えて phallus と妖怪性という蛇と茸の潜在的な共通のイメージから遠野の人々は、蛇と茸が強い絆で結ばれていることを無意識的に感じていて、蛇の祟りは毒茸中毒でなければならなかつたと考えるのは穿ち過ぎであらうか。更に、蛇と茸の関係にはコンセイサマが関わっていないのだろうか。

遠野には今もあちこちにコンセイサマ（写真 12）や陰陽石（phallus-vulva 石）が祀られており、昔は家々にも祀られていた（『遠野



写真 12 山崎のコンセイサマ

土淵町山崎にある山崎のコンセイサマ。賽銭箱には phallus の絵、神輿は phallus 形である。祠の脇に東北大学の地震観測施設があるが、phallus 波まで感じて誤作動するのではないかと心配した。

物語』16 話)。女性がふぐりまでついたリアルで巨大な phallus 形を背負って雪の野道を附馬牛の駒形神社に奉納に往く姿を見るとその信仰心の篤さに感嘆するとともに（浦田穂一著『遠野昨日物語—浦田穂一写真集』2009）、遠野の人々の頭の中ではコンセイサマが蛇と茸を結びつける媒介（snake-mushroom interface）として働いているのではないかとまで思いたくなる。

山口家の没落は昨日、今日のことでなく、7歳の女兒が年老いて死んでしまう年月、少なくとも半世紀も昔の話である。山口家の没落物語は長い年月の間に信仰と嫌悪の対象である蛇と美味と恐怖の対象である茸の互いに相矛盾する二つの性質をもった2種類の生物によって色付けされ、村人たちの間を口伝されながら物語に完成していったのではないかと思う。そもそも家運衰亡と蛇殺しと茸中毒は、事実としても、それらは互いに独立事象として起こった可能性の方がはるかに高いであろう。

また、村人は近隣で出逢った見馴れない二

人の娘をザシキワラシに見立てて山口家の没落の前兆に仕立て上げたのであろう。なぜなら、村人は既に始まっている山口家の衰退を知らなかったはずはないからである。しかし、この物語からかつての遠野の人々の生活の諸相がうかがい知れるように思える。

昔の人々は、蛇殺しがどのようにして毒茸の発生を促し、あまつさえ殺戮者に毒茸を喰わせるように仕向けたのか、その機構を考えたりはしなかったと思われる。それをあえて訊ねれば、「蛇が毒茸に化けて復讐した」と答えたかもしれない（石井正己著『『遠野物語』を読み解く』2009）。また、蛇（祖先神）が発した祟波が蛇への加害者に伝わって毒茸を喰わしめるのだ、あるいは蛇が発した phallus 波？をコンセイサマが感知して茸に伝えたと聞いたかもしれない。しかし、理科系人間の私としては些か面白くないので、物語の中でしか通用しないが、自然科学的な二つの仮説を提出しておきたい。

植物は害虫に襲われると植食者誘導性植物揮発性物質（Herbivore-induced plant volatiles: 略して HIPV）を放出して害虫の天敵の寄生蜂を呼び寄せるという作物と害虫と寄生蜂の三者のネットワークがある（高林純示著『虫と草木のネットワーク』2007）。例えば、キャベツはコナガの幼虫に食われると、その天敵でコナガに寄生するコナガサムライコマユバチを誘引する HIPV を出してこの蜂を呼び寄せてコナガの幼虫をやっつけてもらい、モンシロチョウの幼虫のアオムシに食われると、その天敵であるアオムシサムライコマユバチを引き寄せる HIPV を分泌してこの天敵蜂を呼び出してアオムシ退治させる。

この説を借用して、蛇は死んだり、虐められたりすると特殊な化学物を発散して空気中に浮遊する毒茸の胞子を基質に定着・発芽させるように促すとか、毒茸菌糸に子実体形成を誘導するというような蛇と茸の関係を仮定し、更に毒茸が特殊な化学物質を放出して蛇

を虐げた人に毒茸を喰うように食欲をそらせるなど人と蛇と茸の三角関係的な化学生態学的仮説を空想するのは大いに愉快ではないか。

ついでに、蛇殺しによるキノコ中毒死のキノコの種類は何なのか。食べた者を殆ど全員死なせてしまうような猛毒をもつキノコとは何なのかちょっと見当がつかないが、多くの人が生き残るようでは物語にならないので、そのような毒キノコがイメージされたのではなかろうか。それにしても『拾遺』の228話では、毒キノコは銀茸に似た見事な茸とまで具体的に言っているが、何に相当するのか。奥沢康正・奥沢正紀著『きのこの語源・方言事典』(1998)によると、「ぎんじ」は岩手県ではシロキクラゲ、「ぎんたけ」は岩手県などでシモフリシメジと言い、飯沢氏はアイシメジ、キシメジ、シモフリシメジと言っている。

私は、これらの話に興味を駆られたのは、無論、蛇と茸のコラボであるが、山口家の話には、現代にも通ずる大切な教訓が潜んでいる。孫左衛門は大きな蛇を殺すなど制止したにもかかわらず下男が殺してしまい(20話)、梨の木の周囲に生えた見馴れぬ茸を食わない方がよいと制止したが、下男が提案した毒抜き法を容れて食べてしまった(20話)のである。一家のリーダーたるべき孫左衛門は一家全滅から免れる機会を二度も逸してしまった。リーダーの優柔不断さこそ責められるべきである。

また、事件の直後に親戚縁者、知人などがやって来て、生前に貸しや約束があったと言って禿鷹よろしくあらゆる品物を持ち去ったそうだが(19話)、既に衰退期に入っていた山口家には沢山の負債があったのか、それとも親戚縁者は酷薄非道の人達だったのか興味を惹かれる。このひどい仕打ちは、60歳を超えた老人はすべてデンデラ野(『遠野物語』111話と112話では京都の葬送の地であった「蓮台野」に替えられている)に追いやられるほ

ど人々の生活は厳しかったことを示唆している。事実、遠野市松崎町には飢餓の碑がある。その側の説明板には「江戸時代には10回もの飢饉があり、特に宝暦の大飢饉(1755~1756)では領内人口の3分の1に当たる4,300人が餓死した」と記されている。私には『遠野物語』は隠花植物の世界のように思えてくる。

最後に、キノコは奇妙な植物であり、妖怪性はあるが、蛇のように妖怪そのものの段階にまではいたらなかった。その第一の理由は動物でなかったからであり、第二の理由は可笑しく、可愛く、美味しいからだと思う。マツタケやスッポンタケが神様や妖怪と言われても、とぼけて見えて笑えてくる。樹木は神木として神の依代であったり、古木・大木には木精が宿と言われたりしているが、植物そのものが神である例は、寡聞にして知らない。キノコも神として祀られている例はないと思う。また、樹木やキノコ、ましてマツタケが蛇のように男に化けて女を孕ますというような話も聞かない。逆に人が樹木やキノコになるような話も20世紀になるまではないように思う。

滋賀県栗東市中沢に菌(くさびら)神社(写真13)がある。神社の由来記によると、景行天皇の頃(100年代)、武田折命が料田に田植



写真13 菌神社

滋賀県栗東市中沢にあるが、キノコを想わせるようなものは何もない。無論、コンセイサもない。

えをしようとしたところ、一夜にして菌が一面に生えた。この事が上聞に達し、菌田連(くさびらたのむらじ)姓を賜ったという古伝を背景とする一方で、舒明天皇(630~642年; 著者注)の頃、このあたりをひどい飢饉が襲ったが、近隣の人々は、神域に大発生したキノコを食べて餓死を免れたので、これを神意の顕れと思って感謝の気持ちをこめて、「菌神社」と呼ぶようになったという話も伝わっている。

神社そのものは、欽明9年(637年)に勧請され、当初は口狭比良(くさひら)大明神、室町時代に草平(くさひら)大明神と称えられ、明治初年に現在の社名に改められ、明治6年(1873年)に村社に列せられたという。この神社の祭神は伊邪那岐神、伊邪那美神の先々代に当たる神代七代の五代目大斗能地神(おおとのぢのかみ)と大斗乃弁神(おおとのべのかみ)の男女二柱の神であってキノコではない。

ところが、20世紀の初頭に妖怪ブームが巻き起こって小泉八雲、森鷗外、夏目漱石、幸田露伴、岡本綺堂、泉鏡花、小川未明、志賀直哉、水野葉舟(柳田氏に佐々木氏を紹介した人物)、谷崎潤一郎、室生犀星、芥川龍之介、佐藤春夫、村山槐多など各氏が掌って妖怪文学になんらかの形で関わっていたそうである(東雅夫著『遠野物語と怪談の時代』2010)。明治・大正、更に昭和の時代に亘って文壇を賑わした大御所達のなんと多いことか。それに夭折の画家槐多の名まである。

彼らのお蔭で、それまでは奇妙な生き物ではあったが妖怪にはなれなかったキノコも、このブームに乗って妖怪に仕立て上げられていった。飯沢耕太郎編『きのこ文学名作選』(2011)に泉鏡花の『茸の舞姫』が載っているが、鏡花はキノコ妖怪化の恩人である(『鏡花と怪異』)。海外でもキノコが妖怪になるのは、ウィリアム・ホープ・ホジスン著、各務三郎訳の『闇の海の声』(原題は『The Voice in

the Night』1907)、『幻想小説大全』2002)のように20世紀以降と思われる。このような創られた妖怪は小松和彦氏が『妖怪文化入門』(2006)で定義した3種類の妖怪のうちの造形化された妖怪にあたる。

しかし、現代人は創られた妖怪を見て面白がり、楽しむことはあっても、恐怖や畏敬の念を呼び起こされるようなことはなかろう。従って造形化された妖怪は、幻想性を欠いており、現象としての妖怪や超自然的存在としての妖怪とは次元の違った妖怪、むしろ擬似妖怪とでもいうべき存在である。

妖怪は、昔は他動的、無意識的に創られ、近代に至っては意図的に創られている。創るのは全て脳の働きである。そうすると造形的な妖怪が、造形と十二分に認識されながら、それでもなお太古の昔から受け継いできた感性をもった人々の心の中に浸透して真の妖怪と化し、自己幻想化しないとも限らない。これはとりもなおさず優れた文学作品や絵画、彫刻など芸術のもつ魔性にほかならないと思う。「菌茸妖怪文学出でよ！」 おわり

アオダイショウとスッポンタケの写真はそれぞれ兵庫県立丹波の森公苑・森づくりアドバイザー足立隆昭氏ときのごアドバイザー小寺祐三氏からご提供を受けた。ここに厚く御礼申し上げる。

(断りのない限り文献は全て原著からの引用、写真は著者による撮影である)

後記

この原稿は、『遠野物語』の発刊100周年記念に合わせて2010年の26号に掲載していただき、続けて松茸に生えるキノコの妖怪振りを紹介させていただく心算であったが、2年も遅れて順序が逆転、賞味期限切れの感を拭いえないことを会員の皆様にお詫びする。

なお、本誌27号には古川久彦先生が「マムシが取り持つきのこの縁」という蛇とキノコの真

にリアルなご体験の一文を寄稿されている。その最後に「その上きのこが良く発生する場所は、マムシも棲みやすいようである。このように考えると、きのこマムシの間には何か因果関係があるのではないかと、そんな余分なことを想像したりしている。私の採集歴の中に、これ程までにマムシとの出会いが多いのは一体何故だろうか。この謎は未だに解けなくっている。」と記述しておられる。私は、蛇はしばしばキノコに敵討ちをしてもらってきたので、その恩返しにキノコの仇討をしているように思う。

私の学生・院生時代は、研究室員が大勢いて部屋が足りないので、濱田先生のお部屋にまで院生が二人同居させていただいていた。私も院

生になって1年間だけ同居させていただいた。その際にあてがわれた机と椅子は古川先生が信州大学へ赴任された後のもので、左隣は衣川堅二郎先生の席であった。このお二人の先生の机と椅子は、川合正允氏、相良直彦氏、小原弘之氏、小川眞氏、土居祥悦、堀越孝雄、吉村文彦、鈴木彰、吹春俊光氏など後年の我が国菌学界のリーダー達に引き継がれていったと思われる。大学で学んだ菌学を職業にせず、遊びにしているのは私だけで慙愧に堪えないが、schoolの語源はギリシア語のscholē(スコレー、暇)だそうだから「菌遊学者」「菌楽者」としては本望と自ら慰めている。